

元書店員の制作会社社長が挑む “著者主導”の絶版本電子出版

企業のウェブサイトからチラシまで、各種メディアの企画・制作を手がけるLED BRAIN（名古屋市）の野田収一社長兼ディレクターは、昨年の7月に社内に二つの新規事業部を立ち上げた。

一つは「Books In Brain」というサービス。個人が自分の蔵書をデジタルデバイスで楽しむために、1冊380円で電子化の手伝いをする。電子書籍ブームの火つけ役といって

よい米アップルのiPad

だが、専用の電子書籍販売サイトであるiBookstoreには現在、日本語の本は1冊もない。本棚にある愛読書をiPadで読もうにも、iBookstoreで採用されないことにはその希望は叶わない。

その問題を解消するために、個人の蔵書に限ってデジタル化を代行するわけだ。つまりは76パーで紹介した「スキヤン代行」なので、値下げ競争に巻き込まれそうだが、次の段階としてデジタルデータを米アマゾンの

Kindle向けに最適化するなど、多様なデバイス向けにカスタマイズすることも視野に入れている。ただし、現時点ではどこまでニーズがあるか見えないので、名古屋地区在住のお年寄りを対象に宣伝している。

もう一つは「Archive Book Place」と銘打った独自のサービスで、こちらは絶版本をデジタル化して電子書籍のかたちで販売するもの。出版社が既刊本の電子書籍化に後ろ向きだったり、理解が足りなかった



野田社長は「ウェブ会社の社長だからとんでもない相手の顔ですませない。相手の顔を見て話をしたい」と語る

りする現状を鑑みて、絶版本に限り電子書籍化して販売するプラットフォームをスタートさせたのだ。

インターネット上で絶版本の電子書籍を販売するというアイデアは、高校時代の友人だった作家の藤井誠二氏より相談を受けたことから生まれた。藤井氏は

過去に何冊も本を出してきたが、すでに絶版になっていくものも多い。「なんとか過去の自分の著作を再び世の中に出せないだろうか」と悩んでいた。そこで、ちょうど電子書籍化の機運が盛り上がりつつあったこともあり、出版社側に打診してみたが、電子化という言葉に過剰反応されて、スムーズに進まなかったという。

そこで野田社長は、「藤井の本だけではなく、同じように悩む他の作家も利用できるようなプラットフォーム

ムを設けたらよいのではないか」と思い至った。すでに電子書籍の販売サイトはたくさん存在するが、著者が主導する電子書店は珍しい。

現時点のラインナップは、藤井氏をはじめとして、藤井氏との共著がある学者の宮台真司氏、ライター石井政之氏など25冊にすぎない。だが、現在進行中の話も含めて、「年内には100冊まで持っていきたい」と野田社長。当面は絶版本をPDFデータで提供するが、いずれはePUBでの展開も考えている。

また、電子書籍の価格は500円以下にしない。売り上げは60%を著者、40%をサイトで分け合う。絶版という概念をなくし、書き手に還元できるプラットフォームの構築こそが野田社長の目指すところなのだ。

野田社長は、大学卒業後に5年間、地元の書店で雇われ店長を経験した。そこで、既存の出版業界が抱える矛盾とぶつかりながら、書籍・雑誌の流通や経営を学んだ。その後、リクルートの系列会社で、ウェブ制作担当の契約社員として10年の経験を積む。そして、40歳で独立した。

昔から本が好きだった。古い世界である書店業界を経て、最先端のウェブの世界へ行き、今では電子書籍に取り組んでいる。自分の中では、すべてつながっている」と野田社長は笑うのである。